

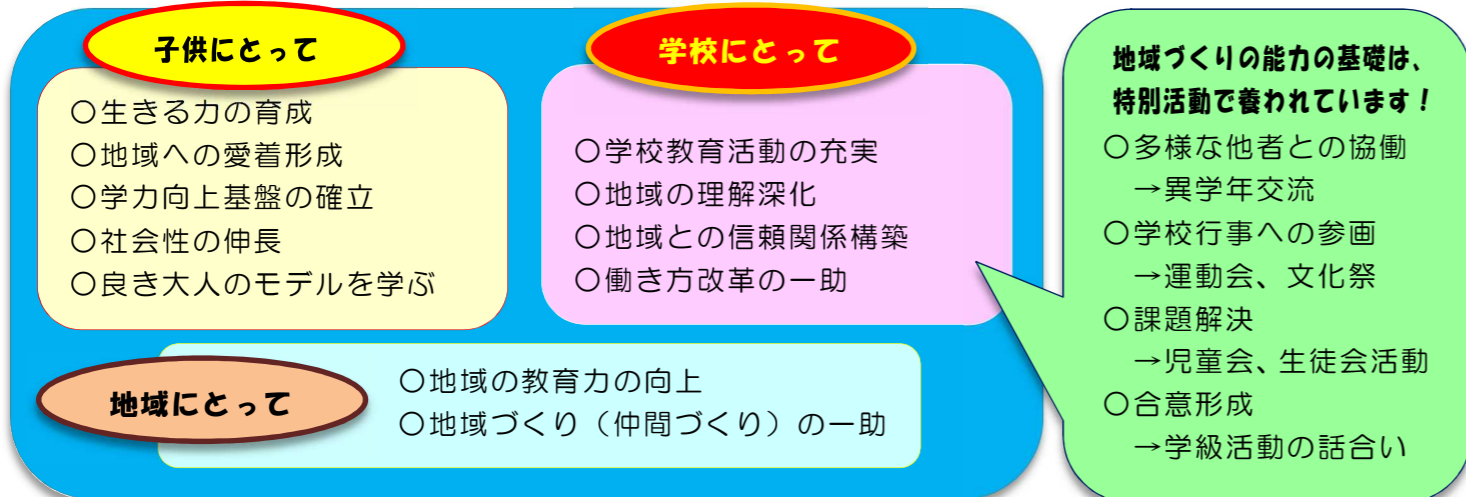


竹林の風

「心と気持ち」、学校と地域の更なる連携・協働を!! ふれあい学習課 石塚秀幸

近年、急速な社会の変化に伴い、学校や地域を取り巻く課題はますます複雑化、多様化しています。そうした状況の中「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という新学習指導要領の目標を学校と地域が共有し、未来の創り手となるための資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程の実現」が求められています。そのことは、学校と地域が相互の連携・協働のもとに「学校づくりと地域づくり」を進め、一体となって子供たちの成長を支えていくことを意味しています。

下図は、学校と地域が連携・協働活動するメリットをまとめたものです。御参考になればと思います。



一般的に、学校に協力的な地域では、教職員が授業や児童生徒指導に集中することができ、よりよい教育活動が実現しやすいと言われています。7月に実施した宇都宮市立御幸小学校での地域フォーラム「みゆきっ子について語ろう」では、地域の温かな見守りがあり落ち着いた中で、子供たちが大切に育まれていることを確認し合いました。

学校と地域の連携・協働という観点では、管内各学校で地域の特性を活かした活動がすでに推進されており、新たな活動の開発ではなく、既存の活動を見直して、そこに地域を「ちょっと」巻き込んでいくことが望ましいと思います。そして、その「ちょっと」を増やしていくことが大切です。

また、充実した学校と地域の連携・協働を実現するには、地域連携教員がキーパーソンとなりますが教職員全員で意識していただきたいこともあります。それは、地域コーディネーターやボランティアさんの活力源が「心や気持ち」であるということです。上三川町立上三川中学校の2名の学校支援コーディネーターさんは「生徒や学校のため」という思いから、梅シロップづくりや園芸活動などに積極的に取り組んでいます。そして、活動の源は、職員や生徒からの挨拶や感謝の言葉であるとのこと。

そこで、地域人材の方々への対応で5点ほど、再度確認してみたいと思います。

- ① お互いに気持ちの良いあいさつをする
- ② 教職員の他に、子供たちも感謝の気持ちを伝える
- ③ 全教職員にコーディネーターさんを紹介する
- ④ 学校の教育方針や考えをお伝えする
- ⑤ ボランティアさんの気持ちや思いを受け止める
子供たちには、地域の方々の活動を伝え、ともに感謝する



学校と地域のよりよい連携・協働活動は、互いの「心や気持ち」を理解し合うことが大切です。学校と地域がお互いに「ちょっとだけ無理を言い合える」、そんな関係づくりを目指したいものです。

深い理解のために

学校支援課 鈴木智也



2020年12月6日、地球の水の起源や生命の原材料の探求をミッションに掲げた日本の探査機「はやぶさ2」が、6年の月日を経て、小惑星リュウグウからその欠片を持ち帰りました。この壮大な計画のプロジェクトマネージャーである津田雄一さん（現東京大学教授）が、あるテレビ番組で、チーム作りについて次のように語っています。

『失敗経験』というとネガティブに捉えられるかもしれませんが、実際は私は非常に大切だと思っています。無鉄砲に挑戦する人ばかりだとチーム、あるいはプロジェクトは立ち行かないんですよ。そういう意味で、過去に痛い目に遭った人、それから失敗と成功の境界を知っている人という意味で、失敗経験というのはとても大切だと思っていました。そういうベテランばかりでは、人を集めることはできません。ですので、チームの中でそういう失敗、経験を積めるような仕掛けというのを、リュウグウに到着するまでの3年余りの飛行の間で、探査機のシミュレーターを使って実際に若手も一緒に混ぜて訓練することで、経験を積んだんです。その中でたくさん、我々は失敗をしました。』

確実に成功を収めるためには、成功と失敗との境界を把握しておきたいところですが、成功体験からだけではその境界は捉えられません。成功の外側の領域、つまり失敗を知ることで、その境界を見極めることが可能となります。はやぶさ2のプロジェクトチームは、成功をより確かなものとするため、失敗の経験を重視しました。そして、「できること」と「できないこと」の境界を見極めることで、自分たちの技術が宇宙空間という特別な環境にどこまで対応できるのか、自己理解を深めました。



子供が言語を習得していく過程について、慶應義塾大学の今井むつみ教授が興味深い話をされています。例えば、「ウサギ」という単語。この単語の意味を正しく理解するためには、今まさに目にしている「ウサギ」だけではなく、目の前にはいないけれども、その他様々な種類のウサギも「ウサギ」と呼べること、しかし、ウサギに似てはいるがリスやハムスターなどは「ウサギではない」ことを理解しなければなりません。

しかしながら、実際には、眼前にいる「ウサギ」という一つの事例からだけでは、前述のように、その単語が指し示す対象全てを正しく類推することはほぼ不可能です。つまり、「ウサギ」という単語がどの範囲までを対象とするのかを理解するためには、「ウサギ」という単語の意味だけを考えるのではなく、それを取り巻く「リス」や「ハムスター」など他の単語との関係も考慮しなければならないのです。

注目したいのは、はやぶさ2でのシミュレーター訓練においても、単語の理解においても、目的とする対象の外側の領域を知ることが、対象そのものへの理解を深めていることです。

理科では実験を通して検証していくという実証過程を大切にしています。そして、やはり、より深い理解のためには、正しい実験方法を知っているというだけでなく、なぜその薬品や器具を使うのか、なぜその操作が必要なのかといったこと、言い換えれば、どこがどう変わると正しく検証できないのか、成否を分けるポイントも理解していることが望まれます。それら本質的な理解は、既知の特定条件下での実験ができるだけでなく、仮に実験の環境や条件等に変化が生じたとしても、その変化に応じた適切な調整や改善を可能にし、さらには、類似した論理構造をもつ問題解決の過程においても活用できるからです。



今回の学習指導要領では、新しい未知の課題にも、自らの知識や技能等を活用しながら、粘り強く対応していく力の育成が求められています。こうした力を身に付けていくためには、問いから解までが理路整然と結ばれたルートを直線的になぞり知識量を増やすのではなく、時間はかかりますが、うまくいったりいかなかったりと試行錯誤しながら、時には、正解とされるルートや境界の外側にも踏み込んで思考し、学習対象をより俯瞰的、多面的に捉えるなど、より理解の深化を図る学びが求められます。そして、そうした学びもまた、深い学びの実現につながっていくのではないのでしょうか。

教職員一人一人の誇りと品格は 教育への信頼を確たるものにする